

6. 古墳時代後期～飛鳥時代のムラ

中期の傾向を引き継ぐように、古墳時代後期のはじめごろまで、住居が遺跡の北半を中心につくられ、ムラは大きく変わることなく営まれました。

ムラは、この後一端廃絶します。土器による時期区分で2、3時期ほどの間、住居跡などの遺構が一切みられなくなり、遺物も皆無に近くなります。

久下東・久下前遺跡のような大規模なムラが忽然と廃絶した原因としては、自然災害などを含む何かしら大きな破局的な変動があったと考えられますが、今のところそうした痕跡はみられません。

この廃絶後、古墳時代後期の終わりごろには、ムラが再興され、飛鳥時代を迎える前には、中期を上回る数の住居が営まれました。

飛鳥時代は、古墳時代終末期とも呼称される段階です。住居跡の数からは、ムラは最盛期を迎えたとみることができます。遺跡の南北を問わず、住居は全体に広がって営まれます。大型住居跡も少数みられます。掘立柱建物跡や井戸跡の確実な例がみられるようになるのも、この段階からです。このころ以降、須恵器も次第に数が増えるようになります(写真8)。



写真8 須恵器甕(飛鳥)
久下前G・206号住出土

7. 奈良・平安時代のムラ

奈良時代のムラは、前代のムラに比べ、住居跡の数などには大きな変化はみられませんが、ムラの北東

部や南東部に、比較的大きな掘立柱建物がつくられ、井戸跡が南縁沿いにみられるようになるなどの変化が指摘できます。

平安時代のムラに関しては、平安時代前期の終わりから中期のはじめにかけて、急激に住居跡の数が減少します。ムラの規模が縮小するとともに、住居間の間隔が拡がり、閑散とした状態になります。そして、平安時代中期前半を最後に、ムラは廃絶します。

8. 中・近世の久下東・久下前遺跡

古代のムラが廃絶して以降、中世には、遺跡の南西部に、薬研堀の堀に取り囲まれた大規模な区画地が出現します(写真9)。この区画地内は、削平されており、内部の施設は不明です。また、地点を異にし、一定のまとまりをもった墓坑がみられるようになるのも中世からです。

近世遺構としては、遺跡の北東部で、現在の清福寺の墓地の西側に隣接する久下東地区E2・E3地点で、円形、長方形の土坑墓116基からなる江戸時代の墓地の調査を行っています。



写真9 久下前D1・27号溝跡(中世)

※写真のキャプションは、一部簡略化している。



- 交通案内**
- 新幹線 JR上越・北陸新幹線 本庄早稲田駅南口から徒歩3分
 - 電車 JR高崎線 本庄駅南口からはにぼんシャトル(所要時間13分) バス停「本庄早稲田駅北口」下車徒歩5分 または 本庄駅南口からタクシー10分
 - 自動車 関越自動車道 本庄児玉ICから5分 無料駐車場あり

本庄早稲田の杜ミュージアム
HONJO-WASEDA NO MORI MUSEUM



本庄早稲田の杜ミュージアム企画展

久下東・久下前遺跡展

本庄台地の大規模古代集落跡の全貌

本庄早稲田駅北側に広がる早稲田の杜地区
竪穴住居跡だけでも700軒超
埼玉県内屈指の規模を誇る古代集落跡 久下東・久下前遺跡
多様で豊富な遺物から遺跡の全体像に迫る

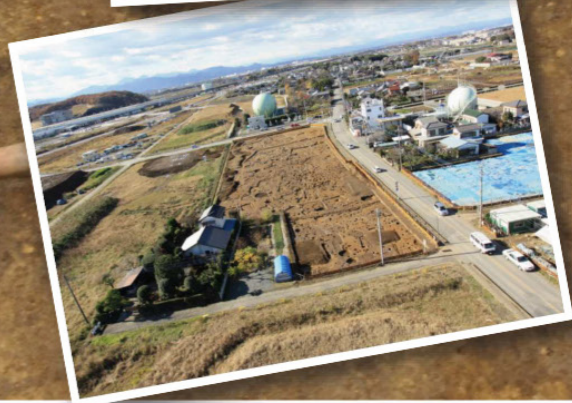


写真 (左上から反時計回りに) 久下東地区H地点、B地点、久下前地区G地点、C3地点、久下東地区E地点 背景 久下前地区C3地点 83号住居跡

令和4年

10月8日(土)～12月25日(日)

会場 早稲田リサーチパーク・コミュニケーションセンター(早稲田大学93号館)2階情報資料室

開館時間 午前9時～午後4時30分

休館日 月曜日(休日の場合は翌日)

入館料 無料

Website <https://www.hwmm.jp/>

E-mail hwmm@city.honjo.lg.jp

TEL 0495-71-6878

FAX 0495-71-6879

〒367-0035 埼玉県本庄市西富田1011 早稲田リサーチパーク・コミュニケーションセンター(早稲田大学93号館)1階



本庄早稲田
の杜
ミュージアム
HONJO-WASEDA
NO MORI MUSEUM

久下東・久下前遺跡展

上越・北陸新幹線本庄早稲田駅周辺の土地区画整理事業に伴う発掘調査は、平成18年度から平成24年度までのおおよそ7年間にわたって実施されました。事業地内で発掘調査を行った遺跡は4遺跡で、そのうち女堀川と男堀川に挟まれた東西に延びる微高地上に位置する久下東・久下前遺跡では、調査面積約45,500㎡全面に、竪穴住居跡716軒のほか、多数の遺構を検出し、旧石器時代から江戸時代にわたる膨大な量の遺物が出土しました。今回の展示では、埼玉県内でも屈指の規模となる古代集落遺跡、久下東・久下前遺跡のムラの歴史をたどるとともに、ムラでの人々の暮らしを物語る多様で豊富な遺物を展示し、久下東・久下前遺跡の全体像を探ってゆきます。

1. 前史およびムラのはじまり

久下東・久下前遺跡の地に人々が残した痕跡は、今から2万年以上前、旧石器時代に始まります。

この時代の痕跡は、わずかな数の黒曜石製石器(写真1)です。



写真1 黒曜石製ナイフ形石器(旧石器)
左:久下東G2出土 右:久下東E3出土

縄文時代にも、人々がこの地を訪れた跡がみられますが、やはり少数の縄文土器片や石器が残さ

ただけでした。出土した土器片は、縄文時代早期から晩期にかけての各時期に及びます。

旧石器時代～縄文時代には、住居を営んだ痕跡が一切みられないことから、短期間のキャンプや狩猟、有用植物の採集などの散発的な活動が行われ続けた場であったことを示しています。

久下東・久下前遺跡の地に初めて住居がつくられたのは、弥生時代の終わりごろになってからです。この時期の住居跡は、微高地の南側に沿って所在する河川跡に近い場所に、少数が間隔をあけて散在する状態でみられます。

2. 古墳時代前期のムラ

古墳時代前期のムラも、数軒の竪穴住居がまとまりなく散在する段階から始まります。住居軒数が時期



写真2 久下前C3-83号住(古墳前期)

を追って次第に増え、ようやく住居の集合体としてのムラが姿を現すのは、前期の後半からです。また、前期の終わりごろには、小型で炉を持たず、多量の土器が廃棄された特異な住居跡もみられます(写真2・3)。古墳時代前期のムラは、主に遺跡の南半、一貫して河川跡を縁取るように展開します。

3. 古墳時代前・中期の墳墓

遺跡の南東部、北堀新田前地区では、古墳時代前期に方形周溝墓1基、前方後方形周溝墓2基が、並んでつくられました(写真4)。前期末には、南側の



写真3 S字甕(古墳前期)
久下前C3-83号住出土

丘陵上に全長70mほどの前方後円墳である前山1号墳がつくられ、中期には、遺跡の西側近隣の同じ微高地上に、墳丘長約65mの造出し付円墳である公卿塚古墳が出現します。



写真4 北堀新田前A2・A3-1～3号墓(古墳前期)

4. 古墳時代中期のムラ

前期のムラが南側の河川跡沿いに営まれたのに対し、中期のムラは、中心が北に移り、遺跡北半の久



写真5 久下東G2-266号住(古墳中期)

下東地区に、住居跡の集中域がみられるようになります。大型住居跡の数が最も多く、しかもムラの歴史の中で最大規模の住居跡がみられることも、この段階の特徴です

(写真5)。また、住居跡に確実に伴う鉄製品がみられるようになるのも、この段階からです(写真6)。



写真6 鉄鎌、石製紡錘車、石製勾玉・円盤(古墳中期)久下前C3-85号住出土

5. 古墳時代前・中期の河川跡

住居跡などの調査と並行して、遺跡の南縁を画する河川跡の調査を行いました(写真7)。この河川跡は、所々大きく蛇行し、分岐しながら西から東へと流れていたと推定されます。

河川跡の覆土中からは、廃棄、遺棄された前期・中期の土器などの遺物が多量に出土しており、古墳時代前期以前に流路が形成され、中期の段階にほぼ埋没しきったことが分っています。また、久下前地区A1・G地点の河川跡では、横鋏、鋤、弓、板材などの木製品や未成品が出土しました。同A2・D1地点の河川跡からは、凝固した棒状の漆が出土しています。

G地点の河川跡から直柄横鋏の未成品や加工痕のある巨大な丸太材が出土していることは、河川に付帯した貯木施設や木製品の加工施設があった可能性を物語っています。



写真7 久下前G・河川跡(古墳前・中期)